

「ニクシ／ニクイ」の語史への一視点

現代語「ニツライ」との対照から――

近藤 明

A Historical Perspective on the Use of *nikushi/niikui* :
A Contrastive Study to *zurai* in Modern Japanese

Akira KONDOH

一 はじめに

動詞に下接する「ニクシ」の意味・用法については、中古のそれについて河辺名保子（一九五九）が、「ある事をするのが嫌だ、する気にもならない、ということ、対象から目をそむけるような感じである」との見解を、簡潔な形ながら示している。その後、詳細な論として松浦照子（一九八五）、林田昭子（一九九六）があり、前者は「本来の心情的な意味が保たれている」「することが困難であるという意だけでなく、その困難さが心情に打撃を与える。不快感が伴うのである」とし、後者は「主として精神的理由により、動作の実現に対して動作主体に心理的抵抗が生じ、ためらっていることを表す」としている。更に漆谷広樹（一九九七）は、「ニクシ」は「精神的に不可能」な場合に限定され、「能力的に不可能な場合」にも用いられる「ニツライ」とその点で異なる旨を述べている。これらの論によって、中古の「ニクシ」の意味・用法や「ニツライ」との相違の主要な点は、相

当の部分が多岐にわたったと言ってよいであろう。

また「ニツライ」の意味・用法の変化について、漆谷広樹（一九九九）は、中世以降「精神的不可能」以外の用法が増えてゆくやかに拡充していくとし、館谷笑子（二〇〇〇）は、大鏡に「精神的理由」ではない「ニクシ」が見られるとの林田昭子（一九九六）の指摘を踏まえて、平安末期から次第に意味用法を拡大したとの見解を示している。

いずれにせよ、「精神的不可能」以外の「ニクシ」の登場・定着が、「ニクシ」の語史の中で重要なポイントの一つであることは確かであろう。

一方、館谷笑子（二〇〇〇）でも述べられているように、当初は「精神的不可能」を中心としていたものが、それ以外への用法へと拡充していくという点においては、近年における「ニツライ」がそれと似た状況を呈しているように思われる。本稿は、現代語の「ニツライ」の状況と対照することにより、「ニクシ」の語史研究上での更なる課題が示唆されるのではないかととの観点から、考察を進めていこうとするものである。

二 現代語「～ツライ」の分類と許容度

現代語の「～ツライ」については、徐修程（一九八三）に論じられているが、それをも踏まえ、以下特に不可能・困難をもたらす要因に着目しつつ「～ツライ」の用法の分類をした上で、それぞれの許容度の整理をしておく。用例のうち小説等を典拠とするもの、辞書類や論文で用いられている用例を利用したのは、カッコ内または注にその旨を記しておく。

【Ⅰ 精神的抵抗感】

① いいづらい話だが、君にはもう金を貸せないよ。

（現代形容詞用法辞典）

② 身内を非難するようなことは書きづらい。（作例）

③ なんとなく女房の実家には居づらい。

（現代形容詞用法辞典）

④ 対戦相手が先輩なので、どうも攻めづらくてしょうがない。

（基礎日本語Ⅰ）

他者への気かね・心理的負い目・気おくれ等が不可能・困難の要因となる場合で、『基礎日本語Ⅰ』で「精神的理由から行為の遂行にブレーキの掛かる場合」としているのに該当する。また、渋谷勝己（一九九三）の（不）可能表現の分類では「心情（不）可能」に相当しよう。

先行研究で言われている中古の「～ニクシ」の性質は、これとほぼ重なるようである。

【Ⅱ 肉体的苦痛・五感への負担】

⑤ 足に豆ができて歩きづらい。（基礎日本語Ⅰ）

⑥ その下のほうの細長く実にごしゃごしゃと読みづらい文字の中に、たしかに蔵王山辰次と載っているのを発見したとき

（北杜夫『楡家の人びと』『CD-ROM版新潮文庫の百

冊』〔以下「百冊」〕p 一一三三

⑦ この席はとくで聞きづらいから、前の席にうつろう。

（外国人のための基本語用例辞典）

⑧ 食事は麦飯だが、半分くらい麦が入っているように見える。慣れないと食べづらい。（尾川正二『帝国陸軍の教育と機構』新風舎 p 八三）

⑤は肉体的苦痛の例、⑥⑦⑧は五感への負担の例で、⑥は難しい字だというのではなく、番付の下の方に細長い字でビッシリと書いてあるために、視覚的負担が大きいというのであろう。蔵王山はこの時序二段の力士である。⑦は聴覚、⑧は味覚（この場合咀嚼や嚥下の際の肉体的苦痛・負担ということもあるかも知れない）である。『基礎日本語Ⅰ』で「肉体的理由に原因することが多い」としているのは、ほぼこのⅡ（の中の特に「肉体的苦痛」）に相当しよう。

【Ⅲ 道具の使い勝手の悪さ】

⑨ このまんねんひつは古くなったので、とても書きづらい。

（外国人のための基本語用例辞典）

⑩ ノートパソコンのキーボードは、小さいし、キーの配列も窮屈で使いづらい。（作例）

これらには、肉体の延長のような道具という点で、肉体的な苦痛・負担感に準じる場合と、もどかしさといった精神的苦痛・負担感の面が強い場合とがあらう。

ここまでの「～ツライ」は、筆者の語感では許容度が高く、また筆者の演習を履修した学部学生・大学院生計十四名に尋ねたところでも、いずれも許容度が高い旨の答えが得られた。

これら許容度の高い「～ツライ」は、精神的苦痛の意味か、肉体的苦痛・負担感の意味において、単独の形容詞「辛イ」とのつ

なかりを強く残していると言えるだろうし、それは松浦照子(一九八五)が中古の「〜ニクイ」について「本来の心情的な意味が保たれている」としていることを想起させる。

また上接動詞に注目してみると、辞書類に見出し語や用例などとして掲出されている「〜ツライ」には、次のようなものがありこれらが比較的定着度が高いものと考えられるが、それらが右のⅠ〜Ⅲの中では主にどれに当てはまるかを、それぞれの上接動詞の後に記してみる。なお上接動詞を幾つかの意味類型に分け、それを「Ⅰ」内に記してある。中古の「〜ニクシ」の上接動詞について「言葉に関する動詞」(林田昭子(一九九六))「視覚・聴覚といった感覚に関わるもの」(館谷笑子(二〇〇〇))が多いという指摘があるが、その点での類似性も感じられる。

〔発話・言語表現〕 言い(Ⅰ) 書き(Ⅰ・Ⅲ) 話し(Ⅰ)

〔対人的交渉〕 頼み(Ⅰ)

〔進退・居止〕 行き(Ⅰ) 戻り(Ⅰ) 居(Ⅰ)

〔視覚・言語理解〕 見(Ⅱ) 読み(Ⅱ)

〔聴覚・言語理解〕 聞き(Ⅱ)

〔他〕 歩き(Ⅱ) 住み(Ⅰ) 生き(Ⅰ)
攻め(Ⅰ) 食べ(Ⅱ) 飲み(Ⅱ)

以上のⅠ〜Ⅲまでのものと比べ、以下のⅣ、Ⅴのものは許容度が異なってくるようである。

〔Ⅳ 技術・能力、外的条件による困難〕

⑪ RとLが多くて、とてもいいづらい名前なのよ。⁽²⁾

(『現代形容詞用法辞典』)

⑫ 「沈黙」の場合のようにアクションのきわめて少ない、純粹にいわば信仰の論理と心理に限定された微妙な動きを跡づけ

ようとする場合、相手が外国人とあつては、いかにも書きづらいに違いない。(遠藤周作『沈黙』解説〔佐伯彰一執筆〕「百冊」p.二五三)⁽³⁾

⑬ この不況下、アート作品は売りづらい。⁽³⁾

⑫は、外国人を主人公とする小説を書くことの技術的な難しさを述べるもので、⑬も「不況下」という経済環境と、商品の性質といった、外的条件によるものである。渋谷勝己(一九九三)の分類では「能力可能」「外的条件可能」あたりと重なつてこよう。これらは筆者の感覚では、Ⅰ〜Ⅲと比べて「〜ツライ」の許容度は落ちるが、学生の間には、Ⅰ〜Ⅲに対して特に許容度は落ちないとの意見も見られた。

ただし、⑪⑬のようなものの許容度が高いとする学生たちでも

⑭ アート作品は、不況も影響してか、売れづらくなっている。⁽⁵⁾

⑮ この薪はしめつけていて燃えづらい。(作例)⁽⁶⁾

⑯ このような気圧配置の時は雨が降りづらい。⁽⁶⁾のように、「〜ツライ」が非情物の性質を述べる形になっているものは、許容度が一段下がる、もしくはほぼ許容不能との見解をほぼ共通して示している。

寺村秀夫(一九八二)で「感情の形容詞は、その対象を表わす補語を主題にとり立て、感情を抱く主体が影に隠れることによつて」「対象の一般的性質を述べるのにも使い得る」としており、それは「〜ツライ」にも当てはまることと考えられる。その中で⑭⑮のように「対象を表わす補語」が非情物で、その非情物の性質を述べる形で「〜ツライ」が使われている場合、許容度が落ちるということになる。

なお、徐修程(一九八三)は、非情物の性質を述べる文であつ

でも、もどかしさ・じれったさを感じている人間の存在が想起される場合、「ゝヅライ」が使える旨を述べており、『現代形容詞用法辞典』も、『ゝづらい』が困難を感じている主体の存在を暗示する」としている。確かに⑭⑮のような文でも、困難を感じている人間(⑭では売ろうとして苦勞している人、⑮では燃やそうとして苦心している人)の存在が想起されるような文脈では、許容度がやや上がる気がする。

⑯のような人間の関与・コントロールがおよばない自然現象については、その余地も少なくなるが、強いていえば雨が降る事を期待している人の立場からは言えなくもないであろうか。しかし天気予報の技術論といった中立的・客観的な立場で述べるのだとすれば、筆者には許容不能である。

⑭⑮のような非情物の性質を述べる形(ただし苦痛を感じる人間の存在は想起し得る)のものを、仮にⅣの第二段階と、⑯のような苦痛を感じる人間の存在が想起されないものを同じく第三段階と呼んでおく。

【Ⅴ 「ゝヅライ」がプラス評価である場合】

分類の基準がⅠ～Ⅳまでとは違ってくるが、このⅤは最も「ゝヅライ」の許容度が低い場合として考えられるものである。

⑰赤ん坊は男より女の方が比較的病氣にかかりづらい。

⑱この種のガラスは割れづらい特徴を持っている。

⑲この家は耐火建築で燃えづらいから、安全性が高い(作例)。
このように上接動詞の表す意味が「病氣になる」「割れる」「燃える」など好ましくないことで、それが困難であることがプラス評価される場合、「ゝヅライ」を使うのは筆者の語感では全く許容不能である。学生の意見も、いずれも許容不能か許容度が極めて低いというものだった。しかし、インターネットなどではこのよ

うな「ゝヅライ」も散見されるようである。田野村忠温(二〇〇〇)は、インターネット上の文書は「一般の出版物と異なり、推敲や校正の過程を経ることが少ない」とその信頼性の問題を指摘しており、そのような点への考慮も必要であろう。だが、後述のように「～ニクシ／ニクイ」に現代ではこれに相当する用法が定着しているところからすると、近い将来この用法が一般の出版物にも現れたり、あるいは更なる将来この用法が広く受け入れられ、正用として定着することがあるかも知れない。

⑳「ラジエーターを内蔵した煙が熱くないメタル性パイプ!やニが付着しづらい優れ物!」(輸入雑貨DOMA)

⑳当医院では、透明の装置の中で最も目立ちづらい装置を使用しております。(和矯正歯科クリニック
<http://www.roy.hi-ho.ne.jp/dona/dona/pipe.html>)

<http://www.kyousei-shika.org/uagawa.htm>

本格的な調査の結果ではなく、不十分な点もあるが、以上のことを一応まとめると

A Ⅵ(の第一段階)・第二段階・第三段階と、精神的・肉体的苦痛との関わりが稀薄になっていくほど、またマイナス評価から中立的になっていくほど、「ゝヅライ」の許容度は下がる。

B Ⅴのように、上接動詞が好ましくない意味を表すものでそれが困難であることがプラス評価である場合、「ゝヅライ」の許容度は著しく下がる。

ということは認めて良いかと思う。

これらについては、単独の形容詞「辛い」の精神的・肉体的苦痛の意味と、それに伴うマイナス評価とが、「ゝヅライ」にはまだ色濃く残っているという理解ができそうである。しかし近年の

「ゝヅライ」の用法のゆれを観察すると、Aの場合の許容度は上がりつつあるようであり、更に②④のような用例の存在は、Bの場合の許容度も上がる兆しであるかも知れない。となると、右のような単独形容詞「辛い」との関連は、稀薄化の方向にあることになる。

三 「ゝニクシ／ニクイ」への視点

本節では、第二節で述べた現代語「ゝヅライ」の状況を、中古の「ゝニクシ」やその後の「ゝニクシ／ニクイ」の展開と対照し、その視点から「ゝニクシ／ニクイ」の語史の上でどのようなことが課題となってくるかを考えてみる。

まず「ゝヅライ」のⅠに関しては、前述のように中古の「ゝニクシ」はほぼこれに近い状況と思われる。

「ゝヅライ」のⅡに対しては、中古の「ゝニクシ」では「肉体的苦痛」のはっきりした用例は確認できないようである(後掲②の例に「呼吸の困難さ」が要因として認められるとすれば、Ⅱの用例に加えることができるかも知れないが)。また「聞キヅライ」に対する「聞キニクシ」を例にすると音そのものが不快であるとか、

②(六条御息所の生霊について)人のとかく言ふを、(源氏は)良からぬ者どもの言ひ出づることと、き、にく、思て、の

たまひ消つを (源氏物語 葵 源氏物語大成二九九⑨)

のように聞こえる内容が不快であるといった精神的苦痛の性格が強いものであり、用例⑦のように音声が小さかったり、聞き取りを妨げる雑音が入ったりするために、聴覚に負担を感じるということではない。この辺は、話題の性質による部分もあるかも知れないが、単独の形容詞「ニクシ」と「辛イ」の意味の相違に起因

する面もありそうに思う。

「ゝヅライ」のⅢに相当しそうな中古の「ゝニクシ」としては、次の例が挙げられる。

③笙の笛は、月のあかきに車などにて聞きえたる、いとをかし。所せくもてあつかひにく、ぞ見ゆる。(枕草子 「笛は」段)

日本古典文学大系(以下「大系」)二五〇⑬

「楽器としての笙の構造の複雑さ、吹奏技法の複雑さ」「呼吸の負担の大きさ」(萩谷朴『枕草子解環』をいうとする解釈、「横笛と比べると大仰(Ⅱ所せし)である」(新日本古典文学大系)という解釈等があるが、笙の笛の扱いの困難さを述べているとすれば、Ⅲに相当する例ということになる。楽器に関しては他に源氏物語に「(琴が)手ふれにくし」「(和琴が)かきたてにくし」が各一例あるが、直接の扱いの困難さというよりは気おくれ(それならばⅠ)という面が強いように思われる。¹³⁾

ここまでは、現代語で許容度の高い「ゝヅライ」と、中古の「ゝニクシ」とでは、Ⅱ以外では重なるところが多いということになるう。

「ゝニクシ／ニクイ」の用法拡充と、現代の「ゝヅライ」とを対照して考えられるのはⅣからであるが、Ⅳに相当する「ゝニクシ」は、中古では林田昭子(一九九六)の指摘する大鏡の

②4年号いまだあらざれば月日申しにくし。

(第一巻 大系六二①)

がそれと認められるものの、まだ少数である(これは年号が存在しないという外的条件によるのであるから、確かにⅣ〔の第一段階〕に相当するだろう)。

漆谷広樹(一九九九)、館谷笑子(二〇〇〇)で論じられている「精神的不可能」以外の用法の拡充とは、Ⅳに相当する用法の

拡充とは言い換えられるだろう。現代の「ゝヅライ」で、IVとI・IIIとの間に、許容度の境界が見られたことは、これの出現・拡充が、「ゝニクシ／ニクイ」の語史の上でも大きな転機であることを支持するものと言えるよう。

更に現代の「ゝヅライ」では、IVの中でも、第一段階、第二段階、第三段階と、順を追って許容度が下がり、単独形容詞「辛い」の意味との関わりもこの順で稀薄化すると考えられた。「ゝニクシ／ニクイ」の語史において、IVが拡充していくプロセスが、これと同様の順序で（またそこから更にVに至るという順序で）進んでいったのかどうか、課題の一つとして指摘できと思う。

現代の「ゝヅライ」では、VとIVの間にも許容度の境界が見られた。単独形容詞「辛^ズイ」との関連でも、Vは評価のプラス・マイナスという点において「辛イ」の意味と大きく離れてしまう（IVでも段階が進むにつれてマイナス評価は稀薄になり、その点で「辛イ」と隔たってきたているが、Vはプラス評価である点で、その隔たりは一層大きくなる）。そのように考えると「ゝニクシ／ニクイ」の語史の上でも、

②⑤ 赤ん坊は男より女の方が比較的病氣にかかりにくい

（小矢野（一九八〇）

②⑥ 棕櫚の縄ならば（中略）水はけはよいし、腐りもせず、強靱であることはたしかだった。それに、燃えにくいという性格も、遮蔽装置としての条件にかなっていた。

（吉村昭『戦艦武蔵』「百冊」p.六八）

②⑦ 「最近アメリカの車はあちこち故障するし……」「へえ、アメリカの車は壊れにくいのかと思った」

（曾野綾子『太郎物語 高校編』「百冊」p.二四五）

のようなVに相当するものの出現・定着は、大きな転機の一つであったと考えられ、その時期やプロセスなども注目すべき課題の

一つとして挙げることができるかと思う。

なお、Vに相当するもののプラス評価というのは、用例②⑤⑦のように、上接動詞が「病氣にかかる」「燃える」「壊れる」のように好ましくない意味を表すもので、それが困難であることがプラス評価される、ということである^{②⑧}。

上接動詞の意味が好ましいことであり、それが稀有・貴重であるためにプラス評価されるという場合があつて、漆谷広樹（一九九九）の掲げる

②⑧ 例えば「弓馬の家の死といふは。城攻の一番乗野合戦の一番鏖。よき敵の首取つて討死するを侍の。死ににくい死とはいふぞ覚えておけ。（丹波与作待夜の小屋節

大系近松浄瑠璃集上二二五②）

という例があるが、このようなものはVに相当する「ゝニクシ／ニクイ」には含めていない。

以上、特にIVの拡大のプロセスと、Vの出現・定着が、特に興味のある課題として指摘できと思うが、筆者の概観したところ、IVの第三段階に相当する「ゝニクシ／ニクイ」や、Vに相当する「ゝニクシ／ニクイ」の確実な用例は、意外に見つけにくいようである。これらがいつ頃から現れるものか、大体の見当だけでもつけておきたかったのであるが、かなわなかった。

中でも「ゝヅライ」のVに相当する「ゝニクシ／ニクイ」は、現代では用例②⑤など何ら問題のない自然な文と認められるし、②⑦のような用例も難なく見出すことができる。上接動詞から見れば、他に「くずれ」「故障し」「倒れ」「しわになり」「破れ」「割れ」など、容易にこのような用例が得られそうである。しかしこのような「ゝニクシ／ニクイ」を歴史的に溯ろうとすると、近世はおろか、近現代になっても昭和の戦前くらいまで

は容易に見出せず、その時期は意外と新しいものであるかも知れない。今後の解明を期したいところである。

(注)

- (1) 使用した辞書類は次のものである。『外国人のための基本語用例辞典(第二版)』(文化庁) 『基礎日本語1』(角川書店) 『角川新国語辞典』(角川書店) 『新潮現代国語辞典』(新潮社) 『学研国語大辞典(第二版)』(学習研究社) 『現代形容詞用法辞典』(東京堂出版) 『現代国語例解辞典(第二版)』(小学館) 『学研現代新国語辞典』(学習研究社) 『大辞泉』(小学館) 『新明解国語辞典(第五版)』(三省堂) 『明鏡国語辞典』(大修館書店)

なお『基礎日本語1』『現代形容詞用法辞典』にはIVと判断される用例も掲げられている(前者では「責めづらい」、後者では「言いづらい(後掲⑪の例)」)。

- (2) 『現代形容用法辞典』は、辞書類の中ではIVの「ゝツライ」の用法を積極的に認める方のように、「言いづらい」には⑪の例のように「物理的にむずかしい場合」と、「心理的にむずかしい場合」があつて、物理的意味の方では「言いづらい」の方が普通であるとするのだが、筆者の感覚では、むしろ⑩のような精神的条件の場合の方が「ゝツライ」の許容度が高い。同書の「にくい・ににくい」の項で、「ゝツライ」と比べて「ゝにくい」では「やや客観的な困難さを暗示し、困難の原因が主体でなく対象にあることが多い」としているのと方向性が異なるようにも思われる。

- (3) 用例⑬は用例⑭に手を加えたもの。相手への遠慮・気がねなどで売るのが困難だというのなら許容度は上がるが、その

場合Iの例になる。

- (4) ただし後述の徐修程(一九八三)で言うように、「物事がうまくいかないことによって感情が悪くされるという動作主の精神的要素」が加わる場合には、許容度はさほど落ちない。
- (5) 用例⑭は、注(8)の記事で誤用か否か問題にされている文。

- (6) 用例⑯は、『明鏡国語辞典』(大修館書店)で非文として掲げられている「雨が降りづらい」に手を加えたもの。

- (7) I・Ⅲの「ゝツライ」にも、非情物の性質を述べるような形の用例はあるが、それらの許容度が落ちるようには思われない。I・Ⅱはその性質上、精神的抵抗や肉体的苦痛を「感じている主体」が当然存在するだろうし、Ⅲも道具である以上はその使い手の存在が前提になり、それを使うのに「困難を感じている主体の存在」が容易に想起されることと関係しよう。中古の「ゝニクシ」について、林田昭子(一九九六)は「無生物主語の動詞を上接し得ない」としている。

- (8) 『朝日新聞』二〇〇二年十月二七日「言葉あれこれ」(校閲部・塚本真理記者)が、⑭の文について「つらく感じる人間が不在」だと許容度が低いとし、「『作品』が主体と見れば誤用です」としているのも、これと同一の方向性に立つものである。

- (9) 用例⑰は、小矢野(一九八〇)に「ゝニクイ」の用例として掲げられている文(用例⑳として後掲)に手を加えたもの。
- (10) 用例⑱は、徐修程(一九八三)に「使えないか少なくとも使にくい」として掲げられている文の一つ。

- (11) 燃料のようなよく燃えることが好ましい場合は、IVの用例⑮のようになる。

- (12) ⑳㉑の用例は矢後誠(金沢大学学生)の報告による。なお

データは二〇〇三年八月上旬時点のものである。

- (13) この他「明日も御ゆるするは参りぬべかめり。(中略) おぼろけにまゐりにくき御髪を」(宇津保 蔵開中 『宇津保物語本文と索引』一一一〇⑦) という例は、洗髪困難な髪^髪の性質という外的条件が要因である点ではⅣに近いとも考えられるが、物(道具ではないが)に対する働きかけがうまくいかないことによるもどかしさ・精神的負担感といった面もあり、それで、その点ではⅢに近いかとも思われる。

- (14) ただし、一見上接動詞が好ましくない意味で、それが困難であることがプラス評価されそうな場合でも、特定の文脈ではそうでないこともある。例えば

自殺が急に出来なければ自滅するのが好からうとなつた。

(中略) 自滅がしにくいから、まづ其一着として逃亡^{かけお}ちて見るのである。

(夏目漱石『坑夫』 漱石全集〔岩波書店新書版〕

第六卷 上段 p三〇)

の場合、「自滅がしにくい」はこの文脈の中ではマイナス評価されている。

- (15) この場合の「死ぬ」は、「理想的な死に方」(大系頭注)というプラス評価を伴っており、それが「望んでも容易には達せられぬ」(同)ということで「死にくい」がプラス評価のことになっている。稀有であるために価値があるとする点では「ありがたし」「得がたし」などに近い。

- (16) 近現代については、『作家用語索引』(教育社)『CD-ROM版新潮文庫の百冊』『CD-ROM版明治の文豪』『CD-ROM版大正の文豪』(以上新潮社)を調査し、『明治の読売新聞』『大正の読売新聞』『昭和の読売新聞戦前ⅠⅡ』も参照した。文学作品では、事物の性質を話題とするような場

面自体が比較的少ないことの影響もあるかも知れない。自然科学・技術系の文献等にも調査を広げることも考慮に値しうか(それらでは文語的な「〜ガタシ」が使用されたり、漢字表記「〜難い」に隠れてしまったりすることも考えられるが)。目にとまったところでは、次の例がある。

兎の腹毛の瘤に氷が附着して、小氷塊になると、その氷塊は益々生長するが、他の部分には凝着しにくいので、或る点だけに雪の核が出来ると説明される。(中谷 宇吉郎『雪』 岩波新書 一九三八年

「ただし一九三九年の第三版を使用」p一四三) 「他の部分には凝着しにくい」ことは、この文脈(人工雪の結晶を作る実験の話)の中ではプラス評価のことである。

『参考文献』

浅田秀子・飛田良文(一九九二) 『現代形容詞用法辞典』(東京堂出版)

漆谷広樹(一九九七) 「平安時代和文における不可能性表現の位相について」『日本語の歴史地理構造』 明治書院

漆谷広樹(一九九九) 「『〜にくし』と『〜がたし』の語誌」(『国語語彙史の研究』 十八 和泉書院)

河辺名保子(一九五九) 「ねたし」(『源氏物語重要語句の詳解』の一項目) (『国文学解釈と鑑賞』二四―二二 『源氏物語ハ

ンドブック』)

金水 敏(二〇〇二) 「文法化と意味——『〜おる(よる)』

論のために」(『国文学解釈と教材の研究』四六―二二)

小矢野哲夫(一九八〇) 「現代語可能表現の意味と用法(Ⅱ)」(『大坂外国語大学学報 言語』四八)

渋谷勝己(一九九三)『日本語可能表現の諸相と発展』(『大阪
大学文学部紀要』三三—一)

徐 修程(一九八三)『「一にくい」と「一づらい」の異同に
ついて』(『日本語教育研究論纂』一)

館谷笑子(二〇〇〇)『複合形容詞「一ガタシ」「一ニクシ」(『国
語語彙史の研究』十九 和泉書院)

田野村忠温(二〇〇〇)『電子メディアで用例を探す——イン
ターネットの場合——』(『日本語学』十九—六)

寺村秀夫(一九八二)『日本語のシンタクスと意味I』(くろしお
出版)第二章・2

林田昭子(一九九六)『「にくし」「かたし」に関する一考察』(『山
口国文』一九)

文化庁(一九九〇)『言葉に関する問答集 第16集』「問39」
松浦照子(一九八五)『複合形容詞の形成と継承——平安時代散
文作品における——』(『国語語彙史の研究』六 和泉書院)

森田良行(一九七七)『基礎日本語I』(角川書店)

山田俊雄(一九九九)『ことは散策』(岩波新書)

〔付記〕

中古の「一ニクシ」に関しての見解には、草野(現姓石倉)千
亜紀(金沢大学教育学部一九九二年度卒業)の卒業論文を基にし
たところがある。用例の検索に当たっては、公刊されている索引
類や、本文・注で掲げたCD-ROMに加えて、国文学研究資料
館「日本古典文学本文データベース」を使用した。また安部清哉
『軍記物語五作品の形容詞使用頻度順語彙表』(『玉藻』三〇—
九九五)『鎌倉時代十四文学作品の形容詞用例数語彙表』(『玉藻』
三六—二〇〇〇)にも恩恵を受けた。